

---

# リオガナイズド マーケットキラー

kisaragi\_jo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リオガナイズド マーケットキラー

### 【Nコード】

N6450M

### 【作者名】

kisara g i j o

### 【あらすじ】

近未来の犯罪捜査は、全国民の記憶がインプットされたISS（情報統合局）のホストコンピューター（TRUE KEEPER）の中で行われるようになっていた。TKの調査官であるキミコは重大事件の再捜査を担当しており、今回もTKにアクセスして情報を精査する役割を担う事になる。事件は『赤いポルシェ』と呼ばれ、数年前にこの国を大きく揺るがした事件だった。

1 トゥルーパー (TRUE KEEPER) (前書き)

## 1・トゥルーキーパー（TRUE KEEPER）

政権交代後一年足らずで外国資本によるマスコミの買収を可能とする法案が可決された。数ヶ月後Mテレビ局は世界のメディアグループに吸収合併される事になった。日本は開国に向けて舵を切ったわけである。新しいテレビ局を通じて半世紀にわたってこの国で行われてきた国民支配の全豹がディスクロージャーされ始めた。本来、民衆の代弁者になるべきマスコミの代表が、いかに政界と手を組み世論を誘導し、旧財閥系経営者にとって都合の良い管理民主社会を牛耳っていたかが暴露された。これこそが国民が持っていた漠然とした不安。不自由な社会の元凶だったのだ。ドキュメンタリーとして放送されるやいなや、数年前、経済連会長として事あるごとに記者会見を行っていた男の政界との癒着ぶりが公表され、製品の不買運動が起こり。僅か三ヶ月で会社更生法の申請となった。あまりの混乱を危惧した新政府は情報の信用性を管理する情報統合省が設けた。これが現在あるIISの母体団体だ。その後、過去の世界を、人間の脳波から具象化できる装置が開発された事で、真実の追求は人口知能であるIISのホストコンピュータシステム（TRUE KEEPER 通称TK）で管理される事になった。今では、全国民が毎年二回の健康診断の際に脳波スキャンを行い、その期間の記憶をインプットしている。TKにはこの国の人間の真実がメモリーされている事になったわけだ。しかしながら、アウトプットは非常に面倒な手順を踏まないと照会する事が出来なかった。各個人の記憶は曖昧な点が多く、一日の天気でさえ雨、晴れ、雪とメモリーされていた。その為、その情報を評価する人間が必要となった。彼らは調査官と呼ばれ、TKの中を捜査する役割を与えられたのである。その仕事は現実の脳を使ってTKの中の情報を精査し真実を突き止める事にある。TKは仮想の時空間であり、言い換えれば過去へのタイムトランスファである。捜査の手順は事件の情報元と

なる人物のメモリーを使用して行われることになっていた。

キミコは調査官として働いて五年になっていた、犯罪関係が主な仕事で、過去に起こった事件の再捜査が主な仕事であった。紙力ツプのコーヒを持って席に着くと、既に数件の捜査依頼がパソコンに表示されていた。通常、捜査は一週間〜一か月と決まっていた、丁度そのころにはサマーバケーションの季節なので、今回は屋久島に行く為の予約を取っていた。

キミコはパソコンに目をやり、捜査案件を目で追った。

《信用調査？5387BA、ニョースキャスター藍本映見が赤いポルシェで内閣戦略局の主幹を務める衆議院議員の車に突っ込み死亡した事件…… 人事考課ランクB/20ポイント》動機が不明という事で逮捕には至っていない。

《信用調査？5388BC、同棲中の大学生が心中した事件……

人事考課ランキングA/15ポイント》

《信用調査？5399LC、六本木のマンションで起こった、興奮剤を使用したセックスによる死亡…… 人事考課ランキングA/30ポイント》

《信用調査？5401LL、晴海ふ頭で船員が銃で殺傷された事件

…… 人事考課ランキングC/40ポイント》

20ポイントとランクが低い、有名事件なので時間がかからないと思いい番最初の「赤いポルシェ」をクリックした。

事件は六年前の冬になる。藍本映見が晴海の環境フェスティバルに参加する内閣府戦略局の川端靖男の車に突っ込み大破させた。川端とそのSPと秘書、それに藍本映見自身も亡くなっている。

駐車場入口に停止した政府専用車に180キロの猛スピード走って来て正面衝突させているので交通事故とは思えなかった。捜査も異常行動性が明らかなので、最初から相手の車を狙って死に至らしめる、自爆テロではないかという疑いで殺人事件として捜査が行わ

れている。

川端は新政権のグリーン派で、CO<sub>2</sub>の排出の排出権取引を推進する会合の会長をしていた。また煙草を規制する法案にも積極的で彼の熱意によって煙草税は1000%となり価格は十倍に跳ね上がった。

法人に対する炭素税を積極的に推進する姿勢を強め、経済界から猛烈な反発をされていた。与党では一番の急進派であり、守旧権力を排除する事が彼のライフワークとなっていた。そのような性格であり、立場でもあった彼を良く思っていない人間は多く、特に煮え湯を飲まされた煙草業界、CO<sub>2</sub>排出量が大きく多大な影響の出る業界団体からは、グリーンテロと呼ばれ、憎まれていた。

捜査は8ヶ月に及んだが藍本映見には動機が見つからなかった。彼女は新与党によって開放された放送局の新チャネルの看板キャスターで彼の政策に賛成していた人物である。一時は不倫関係にあったのではないかと騒がれたが、そのような事実はなく、自爆テロのような過激な行動を生むバックグラウンドの事実も出てこなかった。

今回、再捜査の依頼が起こったのは、今年になって彼女の起こした事件と酷似した事件が2件たて続けに起こったからである。両事件とも、容疑者は二十代後半の女性で一人は航空会社に客室乗務員、もう一人は財務省の主計局長の娘で、会計士をしている女性だった。二人とも赤いポルシェで車列に突っ込み犠牲者を死に至らしめたのである。一人はダム建設を中止にしたXX市の市長、もう一人は動物愛護活動家で映画監督のニュージランド人だった。

捜査線上には二つの事件の関係性は認められなかったが、ただ赤いポルシェを使う手法と容疑者が若い女性である事、殺害された男達が両方ともグリーン政策を推進していた人物であるという事が重なり合っていた。

二十世紀の末に起こった新興オカルト宗教団体による事件と同じく、洗脳ではないかという憶測が飛んだ。しかし二人の被疑者が団体に所属している事実はなかった。

キミコは自分のIDのタイピングを行い、捜査開始日を入力した。既に二人の人間が調査に入っているようだ。プログレス（捜査進行状況）にはTKに入った日にちとID？が光っていた。

キミコは事件当時、捜査を行った個人プロフィールを表示した、捜査した人間は湾岸署の捜査一課警部補、警部、政府系調査機関、FBI関連組織、被害者の両親、被害者の元同僚、被害者の両親の依頼により捜査をした探偵。各人物のプロフィールを見て、一番人間関係の希薄な萬坂探偵事務所の如月龍彦をボディとして使用することにした。

TKのホストコンピュータにアクセスして仮想空間の状況を表示した、時期は6年前、政権交代が起こった年の冬になる。萬坂探偵事務所は港沿いの高台の上にひっそりと建てられた三階建の古いビルの一室にあった。

男性は38歳独身。私立探偵を開業して三年で、それまではバンクを拠点に通信社に送る映像と記事を取材して事になっている。報道局賞も貰っているので戦場ジャーナリストとしては及第点だったのだろう。その頃、現地で結婚しているが、すぐに離婚して十年振りに日本に戻り、最初は写真を撮っていたようだが、すぐに知人の情報調査会社を引き継ぎ私立探偵を始めている。

都合が良いのは、日本にはあまり多くの人間関係はなく、両親も既に亡くなっているので、事件捜査以外の時間が取られる可能性が少なかった。その上、適度に日和見主義で、キミコにも捌けそうな人格だったからだ。いくら仮のボディとはいえ、色々と共存関係を経験する中で、出来れば調査の邪魔となる人間関係は避けたかった。前回、ボディに使った保険調査官の女性は極度の恋愛中毒で、捜査より合コンに行く事を重点とする脳神経のメモリーとなっていた。その為、捜査は全く進まず三日でリタイヤした苦い経験があったので、今回は、その事もあり、始めて男性の仮想ボディを試す事にしたわけだ。

男のボディに入ると、睡眠時間さえ合わせれば、肉体のコントロ

ールはキミコの支配下となる。ただ彼のメモリと構成する思考情報を取り出す必要があるので脳波制御は切ってはいなかった。何かあれば呼び出せる仕組みになっている。

コーヒを飲み終える調査を始める為に機器を頭に取りつけ身体をリラックスさせてスイッチをオンにした。すぐに視界は信号を脳波にシンクロさせる為、電信信号の連続になり消えた。目を開くと、世界は違う場所にあった。少し落ち着くために深呼吸する。

「いったいどういうつもりなんだ、人の体をのとりやがって」龍彦の不機嫌な声が響いた。過去の記憶は彼に支配権があるので邪険にするわけにもいかない。

捜査に関する話を一通りしたが、思ったより抵抗され融通が利かなかった。日和見主義と書いてあったので柔軟性があると判断したのが間違いだったのだろうか、それとも、慣れていない男性のボディを使う事に無理があったのだろうか。

「この事件の信用調査が終われば元に戻るから」

「だから事件は終わったんだって、彼女の体から興奮剤の一種の検出された、合成麻薬だ」

「貴方のメモリはそこまでだけど、そう思っていないメモリもあったのよ、TKがオートスコアリング機能の信用度では8.2なんだから」

「何を言っているか分からないんだけど」

「早く言えば、100人のうち18人に事件解決に疑問を持っていたという事」

「とにかく、私の体を勝手に使うのは止めて貰いたい、私は午前中に行っていることがある」

「競馬の予想でしょ、そんな事やってるからいつまで経っても一人でコインランドリーに行く事になるのよ、この事件を解決さえしていれば人生変わっていただろうに」

「お前、俺の考えてる事が分かるのか？」

「情報信号は共有していますから」



「ったく、何なんだよ。俺じゃなくても他の奴で良いじゃないか、警察署だってかなり真剣に捜査を実行していたわけだし」

「大丈夫、大丈夫、私警察は嫌いだから。それに貴方の方が自由に活動できるし」

「それって俺に何のメリットあるわけ？」

「貴方にとつては捜査に協力したという事で、本物にクレジットポイントが贈られるでしょう。信用が上がれば仕事も増えるし、経済力も豊かになる。そうすれば女性にも優しくして貰えるわよ」

「大きなお世話だ、俺はこの生活で十分満足している」

「へえー、一日何回後悔のため息ついているんだか、こんな見通しの立たない生活をして何の意味があるんだ、もう40歳だというのに。もう死にたい」

「うるさい、人の脳を読むな、それが協力の条件だ」

「わつかたわ、条件をのむは、だから3週間だけ我慢してね」

キミコはボディの本体である如月龍彦の申し出を受け入れた。寝ていてくれるのが一番いいのだが、夜だけでは活動時間が限られる、それに、この探偵の推理能力は悪くない、並行情報をリンクすれば犯人に辿り着く可能性がある。

今回の事件情報のメモリー提供者の中では推理力は警察官や、そのた調査会社の能力を上回っていた。但し、詰め甘さと、最後は依頼者の意見を優先する、日和見主義で未解決のままの事件が多くあった。上手く情報を引き出せれば情報屋としても使える可能性がある。

キミコはボディを借りて地下鉄の駅へと向かった、六年前に地下鉄工事はほぼ終了していたので、特に違いはなかった。キミコの時代では労働はワークシェアリングにより自由に時間を選択でき、能力によって細かく給与が変わる仕組みとなっていた、最初は平等でないと不平不満が新政権に起こったが、徹底的なデスクロージャ―と能力の根拠となる情報の数値化により安定期に入った。

もし能力レベルが到達しない場合は教育プログラムへの受講がり

クエストされ、徹底的に脳のリオガナイズが行われた。脳医学の進歩で人の能力を大幅に改善できるようになったので、徹夜の受験勉強や、偏差値等の無駄なランク付けは必要なくなった。人間として向上心があれば必ず上にランクされる社会となっていた。今までこの国を仕切って来た世襲とお金でのランク付け社会は終わったわけである。

## 2 容疑者の足取り（前書き）

## 2・容疑者の足取り

地下鉄の駅を出ると道の狭さはまだ改善されていなかった、相変わらずガソリン自動車も走っている。自転車専用道路の設置も、今の所全く始まっていなかった。路上で煙草を吸っている人がいるのも驚かされた。キミコの時代にはシガーバーでしか味わえなくなっていた。煙草税は2000倍に跳ね上がり20本入りの煙草は4000円が普通だ。高級嗜好が好まれ紙巻きの廉価品は店頭から消えた。

犯行に至る前夜、このマンションを訪れて家で飼っていた猫を預かって貰っている。

円筒状の螺旋階段があるエントランスを入り、住居用の塔に抜けるエレベータ乗り場に向かった。

「一つ聞いていいかしら」キミコは約束通り、龍彦のメモリーを勝手に覗くことなく言葉で尋ねた。

「なに？」と龍彦の不機嫌な言葉が聞こえた。同じ声帯から発せられるので、聞き取るのが難しかった。

「仙道庄司は藍本映見の恋人というわけではないのね？」

「ああ、今は恋愛関係にはなかったと言っている、元彼という事かな。ただそんなに気安くあっているわけではなく、その日がお互いの友達の結婚式以来で五カ月ぶりだったと言っている」

「だが実際は、それは真実ではなく、一か月に一回は会っていたようだ」

「どうしてそんな嘘を？」

「お互いに恋人がいたからな、彼女には同性の、男には婚約者が」

「それは初耳ね、彼女は同性愛者なの」

「バイセクシャルって言った方が良いんだ、男との恋愛もあったようだから」

「本当なの？」

「日本の大手TV局、新聞社の記者クラブ14団体組は決して報道しないだろうけどな、週刊誌では有名な話さ、この国の大手マスコミは真実を国民に伝えるために存在しているわけじゃないからな。」

この時点では、情報統省は設立されておらず、報道改革は始まっていなかった。新しい政権は公約にしていたはずにもかかわらず、記者会見は記者クラブ主導という旧政権と同じやり方を踏襲していた。これを認めてしまった官房長官は三ヶ月後にネットで放送局幹部との抱き合わせ接待を暴露されて辞任に追い込まれた。

「この部屋の男と少し話をしてみたいんだけど良いかしら？」

「別に俺は困らないで」

「貴方のメモリーを一瞬スキャンさせてくれない、そうすれば私が話を出来るんだけど」

「ダメだね、約束は約束だ。勝手に頭の中を見られてたまるもんか」  
捜査手順から外れるが、龍彦にやらせるしかなさそうだ。彼自身をイレースしてしまえば早い、知識情報までクリアしてしまえば、もっと面倒な事になる。

「じゃあ、これだけ聞いてもらえないかな……」

「何、俺の調査が甘かったっていうのか？」

「あつ、私のメモリーを読んだわね！」

「あのなあ、僕は頼んで一緒にいるわけじゃないの。貴方が勝手に体に入ってきているわけ」

「私は約束しているんだから、貴方も私のメモリーを読まないは礼儀でしょ。それに未来の事を知られるのはペナルティになるのよ、それが約束出来ないんだったら、悪いけどどメモリーをイレースさせてもらうしかないわ」

「結局、僕には選択権がないんだろ。それであんたの聞きたい事は？」

「被害者が当日に彼の携帯に電話をしているの、その内容を確認出来ないかしら」

「それってどうやって聞くわけ。僕にとっても始めての話じゃない

か、あんたは未来から来て知っているだろうけど」

「タイムラグか、まだこの時点では分かって無いのよね」

「あんたは電話の内容を知っているんだろ？」

「情報提供者は彼だけなのよね、クレジットレベルは1、最近、ウィルスの氾濫が酷くて、偽造されたメモリーかもしれないのよ」

キミコはボディのコントロールを龍彦に戻した。彼はすぐに呼び鈴を押した。落ち着きのないせつかちな性格とプロフィールに書かれていたので、その点は注意しなければ行けない。

「どなたですか？」と男の声がした。拒むような返事だったが何とかドアを開いて貰う事が出来た。仙道は頭を丸刈りにしてメガネを掛けていた、部屋の中で黒レザーのジャケットに白いパンツを合わせていた。黒ぶちのフレームの奥に異様に大きな二重の目がせわしく揺れている。この時代のファッションが思い出せなかったが、かなり気味の悪いタイプだ。カメラマンという人種を、そんなに多く知っているわけではないがアクの強さが売りにする仕事なのかも知れない。それを考えるなら探偵の龍彦の公務員のような姿は何だろう、目立たない事が探偵として優秀だと、どこかの探偵学校で教えられたのだろうか。身長百七十五センチだが猫背なのでもう少し小さく見える。ベージュのトレンチコートに地味なレジメンネクタイ。顔は小さく頭は癖毛で脇には白髪が混ざっている。どう見ても腕っ節は強そうには見えない。実際、プロフェールでは格闘技に関する事項はなかった。あるとすればアーチェリーを学生時代にやっていた事ぐらいか、街中で弓を引くわけにはいかないのか、何の役にも立たないが。監察していると、龍彦は何度か頭をかく仕草をして本題に入った。

「映見さんから、お宅に事件当日に電話をかけているようなんですが、どんな内容だったか教えて貰えますか？」

「それは、プライベートなことなので、特にお宅に話す義務なんて無いでしょ」

「そうですね、それは困った事です。貴方がそういう態度で来られ

るなら、携帯電話を警察にお預けするしか無いようですね」

「また、警察かよ、知らないって言っているだろ」「仙道の眉間に青く血管が浮き出していた。怒りは罪悪感がある場合に人が良く使う手だ。」

「それだけ教えて頂ければ帰ります」

「だから電話なんか、無かったって言ってるだろ、自爆するのは勝手だけど、こつちも迷惑なんだよね」

「お願い事があったんじゃないですか、彼女はスタジオを出て三時間、迷った末に貴方に会いに来た、多分、家に行く前に何度か電話しているでしょう」

「推理するのは勝手だけど、話してないものは仕方ない」

「貴方は婚約者と一緒にいらっしやっただんですよね、ベルが鳴っているのに出ないのは不自然じゃないですか？」

「じゃあ電源が切れていたんじゃないか」

「そうですか」

キミコは話しかけられないので、それで諦めるしかなかった。

ドアを閉めると、キミコは呆れた声をあげた。

「子供の使いですか、こんな事なら私がやるんだったわ」

「もしかしてあんた気がつかなかったか？ あいつは電話のあった事を認めたじゃないか」

「なによそれ」

「プライベートな事なのでって言ったろ」

仙道は後に、猫を預けに行って良いかと聞かれたので、夜の十時以降なら良いと答えたと話している、但し彼女が来た時間には帰れず、会う事も無かったと言うのが調書の結果だ。

事務所に戻り、調査報告書を取り立たせた。萬坂探偵事務所への依頼者が、容疑者であった藍本映見の祖父であった為に、内情調査という名目になっている。親族にとっても彼女の行動は寝耳に水で納得が行かなかったのだろう。五枚のプライベートペーパーに印刷され一ヶ月間の調査結果を呼んだが特に目新しい情報はなかった。

現時点で黙認されてしまった情報がないかどうか、調べたかったが、龍彦のメモリーをスキャンをすると非協力的になる恐れがあるので、今のところは止めておいた。

「他に交友関係は調査していないの？」

「もちろんしたさ。でも事件に繋がるような交友関係はなかった。

もちろん亡くなった議員ともだ」。「彼女は、環境運動に熱心な推進派だったという事だったとおもったけど、その辺りはどうなの環境NPOとか、何かグループに接していなかったの」

「彼女はニユースキャスターなんで、その手の交友関係は腐る程いるさ、だけど、あの議員を殺す事まで考えないけない話はなにもない」

「今は何か見落としがあるかわからないから、もう一度行った場所に連れてつてよ」

「わかったよ」

龍彦は、オーバーコートを羽織ると外に出た。風は冷たく、初冬の空気が体を冷やした。龍彦が向かった先は、彼女が会員になっていたスポーツジムだ。都心の駅から少し離れたタワービルの二階にあった。

「このジムのトレーナーで、橋爪という男がいる、彼女が属していた環境NPOの代表だ、最近は外来魚により既存主の生活環境が脅かされると、かなり執拗に釣具メーカーを追いつめたらしい、ただ、過疎化の進んでいく村にとっては、湖は唯一の観光産業で、それを抜きにしては語れない街も出来ている。農業で食えないのと一緒に、川の漁業ではくっていけないからな」

「川端もエコNPOにいたらしいんだけど。何か関係あるのかしら」  
「年齢が違いすぎるよ、川端がやっていたのは原子力発電所とかダム建設の大規模なものだ」

「彼らには共通点はないわけね」

キミコは諦めたように言葉を吐いた。過去のメモリーはこちらからアクションを起こさなければ、決まった未来の結果に辿り着こう



とする。混乱を避けて、間違っただけでも簡単な結論にたどり着こうとするのは人間の脳とそっくりだった。

「まあ、とにかく話して見れば良い」

「良いって？」

「あなたにまかすよ、俺はあいつが苦手だから、それに気をつけてくれマツチヨゲイという噂だから」と龍彦はまるで顔を隠すようにフェードアウトした。メモリーを共有するのに慣れてきたのか、彼の孤独。言いかえればメンツを覗きこまない限り、怒りだす事はなかった。男という生き物が守り続けている、女性から見れば何の足しにもならない情報が、彼らにとって大ごとで、それを隠そうとするから、覗くのだが、決まって無駄骨が多かった。トキコは言われた通りフロントで橋爪を呼んでくれるように言った。男は三十代後半の小柄な男だった。肉体をプロテインで肥大化させ、髪をぼぼ丸刈りにしているので顔が小さく見れる。細い眼を作り笑いのような顔で引きつらせながら握手を求めてきた。竜彦にはばれないように、軽く握る。

「それでどんな事を聞きたいんですか？」橋爪はフィジカルチェックをする席に向かって座った。

「映見さんの個人インストラクターをされていらしたんですね？」

「ええ、そうです」

「事件を起こす前はとうだったでしょうか、ストレスになる問題を抱えていたとか、何か話されませんでしたか」

「私たちが話すのは殆ど体の事ですからね、どこの筋肉に脂肪が残っているとか、もしストレスがあればどんなサプリメントを取ったらすっきりするとか」

「外とでお会いする事は無かったですか？」

男は、そら気たどという顔をした。

「それは既にお話したように。私がやっているNPOの団体に一時興味を持たれて、運動に参加頂きましたので」

「どのような事ですか」

「海岸のゴミ掃除にも行つて貰いましたよ、それに最近は環境をテーマにしたマラソンとか色々あって、貴方がお聞きになりたいような過激な活動はしていません。今は縄張りをどうやって周りの人に与えて参加して貰うかというのが基本ですから」

男の良い方が、いかにも古い団体とは違い、今はクリーンでオーブンな組織を印象付けたいのだろうと思った。実際インターネットなので参加を呼び掛けて一緒に何かをする事で、環境だけでなく人の輪からお金と縄張りにまみれた競争社会のストレスを忘れる事が出来ると、近年になって参加する一般市民は多くなり。団体のメンバーも二千人を越えているらしい。

「彼女と最後に会われたのはいつですか？」

「それがね、ちょうど僕がバケーションで二週間屋久島に行っていた時なんですよ」

「じゃあ彼女は一人でトレーニングを？」

「一応メニューは作って渡しておきました、ただウエイトは無理なので他のトレーナーを紹介したんですけど、一度も呼ばれなかったようです」

「じゃあ一人で黙々と機械をしてた」

「いえ、あんまり来ていなかったようですよ。調べれば分かりますが」

「じゃあお願いします」

男は入館の記録票を持ってきて話した。二週間のうち来ているのは三日、事件を起こす前の一週間は来ていない。

「一週間来られてないですね」

「あれ、おかしいな最後の週に一回来たと聞いてたんだけど」と橋爪は言つてフロントに聞きにいった。

「ああ、休みの前日に来ただけで何もしないで帰つたみたいです。僕が出てると思つていたんでしょうかね、休みは言つてあつただけど」

「応対をした方に話を聞けますか？」 TKの中ではメモリーとメモ

リーが完全な形で結びつけられていない、それは焦点化の法則を好む人間の脳と同じで、複数点で他のメモリーとリンクすると答えが導くのが難しいからだ、この情報の優先度がオートスコアリングによって処理され上位リンクのみをメモリーする事になっている。

受付をした女性は出てきて「橋爪さんと会うのでなく、ジムのメンバーと待ち合わせだったのかも知れませんかよ」と言った。  
「待ち合わせ？」

### 3・日本語を話すキューイ

ニュージールランド人の発明家が日本に水の浄水器を売り込みにやっ  
てきていた事はわかった。ただその情報は事件記録とリンクしてお  
らず、名前さへ載っていなかった。

「クリスハートって名前は知らなかったのよね？」

「（……今日はじめて聞いたんだから知るわけないだろ）」

「会社を設立して1年か、このホームページを見る限りは販売が好  
調とは言えないわね」

「（藍本映見の人脈を頼って売込みでもしたのかな）」

「その線で情報をサーチしてみたんだけど、何も見つからなかった  
わ」

#### 4・都会のかかし

トウールキーパーになって数ヶ月目の事だったS E Iのオフィスで、ある事件の対策で追われていた。TKにウィルスがセツトされ記憶のない人間が現れたのである。まるで痴呆症を患ったようにメモリーは回答を返さない、そればかりか他の人間に感染し始めたのである。イレース（消しゴム）屋と呼ばれた彼らは数年にわたってTKを脅かし続けた。

現在、アンチウィルスソフトによってほぼ取り払われたが、同化して残っているウィルスはSCARECROWと呼ばれ。数力月に何度か動き始めて問題を起こしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6450m/>

---

リオガナイズド マーケットキラー

2010年10月8日13時39分発行